

## ステパノ、最初の殉教者

2009年5月6日 アシェル・イントレーター

ステパノは私のヒーローの一人です。彼の墓所と言われている場所はベツ・ジャマルで、エルサレムから35キロ離れたところにあります。3年間私はその場所の近くで暮らしました。ステパノは最もキリストに似るようになった人です。彼の短い人生は私たちにとって黙想し、模範として見習う価値のある見本です。

### 性格とカリスマ性

神は私たちに御霊の実と賜物とで歩むように命じられました(ガラテヤ5章、1コリント12章)。私たちは倫理的な性格と神聖なカリスマの両方を持つべきなのです。ステパノは最初の執事に含まれており、「御霊と知恵とに満ちた、評判の良い人たち七人を選びなさい。」(使徒6:3)と述べられています。さらにステパノについて「恵みと力とに満ち、すばらしい不思議なわざと行っていた。」(使徒6:8)と述べられています。

### 柔和さと大胆さ

私たちは神の前でへりくだるように命じられており(ミカ6:8)、しかし同時に「しもべたちにみことばを大胆に語らせて」(使徒4:29)ともあります。両方を行う能力及び品性のある人はほとんどいません。ステパノはあたかも彼の集会での給仕人のようにへりくだって奉仕しました(使徒6:2)。しかし、彼の時代の最高宗教指導者たちに対して、彼らの面前に向かって「かたくなで、心と耳とに割礼を受けていない人たち。」(使徒7:51)と、大胆に非難しました。

### 十字架にならって

私たちの弟子訓練はあらゆる点においてイエシュアにならうよう導くもので、それは主の死にならうことも含まれます(ピリピ3:10)。ステパノは最初の殉教者であっただけでなく、彼の死の瞬間はイエシュアの死の瞬間と類似しています。人々が彼を石打にした時、彼は叫びました。「主イエスよ。私の霊をお受け下さい。」(使徒7:59)それはイエシュアの叫び「父よ。わが霊を御手にゆだねます。」(詩篇31:5、ルカ23:46)と並行しています。

ステパノの最後の言葉は彼に対して罪を犯した者たちを許す言葉でした。「主よ。この罪を彼らに負わせないでください。」(使徒7:60)これは、彼がイエシュアの十字架の上の祈りにならっているのです。「父よ。彼らをお赦してください。彼らは、何をしているのか自分でわからないのです。」(ルカ23:34)

## 彼の栄光にならって

私たちはイエシュアの死にならうだけでなく、主の栄光にもならうよう召されています(ローマ 8:17、29-30)。私は、あたかも主が十字架にかかり、そしてあたかも主が栄光を受けたように毎日イエシュアを黙想しようとしています。この二つの光景を合わせるの逆説的に見えます。それらはあまりにも異なっており、反対とも言えるからです。しかし、ステパノはこの二つの光景(苦しみと栄光)を両方とも同時に達成したのです。

彼が石打の刑にあう直前、彼を告発する人が彼を見て「彼の顔は御使いの顔のように見えた」(使徒 6:15)のです。イエシュアが栄光を受けた姿で目撃された時、ヨハネはそれを「顔は強く照り輝く太陽のようであった」(黙示録 1:16)と表現しています。ステパノはイエシュアの十字架と栄光両方の頂点に同時に到達したという、人類史上最も並はずれた達成をとげたのです。

## ヘブライとギリシャ

ステパノはユダヤ人でしたが彼の名はギリシャ名でした。彼は初期のヘブライ語を話すメシアニック信者とギリシャ語を話すメシアニック信者との間で生じた問題を解決するために選ばれた一人でした。(使徒 6:1)明らかに彼は両方話せました。彼の二文化的能力は鍵となる要素です。使徒パウロも完全に二文化的でしたが、使徒ペテロは基本的にその地方のヘブライ文化の元にいました。西洋キリスト教はギリシャ・ヨーロッパ的文化の線に沿って発展しました。現在多くのクリスチャンは同様にヘブライルーツを再発見しています(ローマ 11:15-33)。

二つの世界観—ヘブライとギリシャ—は神のお考えの全体を知るのに重要です(使徒 20:27、使徒 1:6, 8、エペソ 2:11-3:6、黙示録 7:4, 9)。ステパノはギリシャ語を話しましたが、ユダヤ人の宗教指導者へのメッセージ(使徒 7:2-33)は恐らく聖書のユダヤ的、歴史的な文脈における福音の最も広範な提示ではなかったでしょうか。

## 証言と殉教

「殉教」という言葉の元の意味は「証人、証言、証拠」です。パウロはステパノの死を目撃し、それは彼にとって強烈な証となり、最終的に彼を信仰へと導くものとなりました(使徒 22:20)。パウロの説教の恩恵の大部分はステパノにさかのぼることができるという、いくつかのヒントがあります(1コリント 9:16)。

いずれにせよ、私たちは皆死にます(もし主の再臨が遅れるならば)。問題はあなたがたが死ぬことではなく、あなたがたがどのように死ぬかであり、何に対してあなたがたの人生を捧げるかです。時々私は、自分の「キャリアの目標」はステパノのように福音を語って死ぬことだと言います。

復活の際、私たちは皆人生で何をしてきたかによって、良きにつけ悪きにつけ報いを受けます(II コリント 5:10、黙示録 20:12)。すべての人が同じレベルの復活を受ける訳ではなく、ある者はより優れ、ある者は低いのです(ピリピ 3:11、ヘブル 11:35、黙示録 20:4-6)。

イエシュアの再臨の前に、死に至るまで自分の命を捧げる人の数はすでに定められています(黙示録 6:11)。最終的に何人になるのか私たちには分かりませんが、**最初**が誰であったかは、私たちは知っています。

### 祈りのリクエスト

ローマ教皇ベネディクト 16 世は来週イスラエルを訪問する予定です。彼の訪問はカトリック教会とユダヤ人との関係において歴史的な転換点を迎える可能性があります。

1. どうか彼がイスラエルに対してイエスの良き証となるようお祈り下さい。中近東にいるほとんどのユダヤ人とアラブ人はカトリック、プロテスタント、福音派の違いが分かりません。ここにいる人々に対し、教皇はクリスチャンであり、世界中のキリスト教界の最も顕著な例です。彼の訪問は地方のメディアで大きく取り上げられ、良かれ悪しかれ、ユダヤ人がどのようにイエスやキリスト教を考えるかに影響を与えます。
2. どうかカトリック教徒がイスラエルに対して良い態度を持つようお祈り下さい。世界の大半が革新的・世俗的ヒューマニズムまたはイスラムのジハードを通して反ユダヤ主義に方向転換する中で、カトリック教会の進路はまだどちらともつかない状態にいます。十分な祈りを通して、カトリック教会はジハードやテロリズムの波に対する重要な防波堤となる可能性があります。
3. どうか今の世界において、10 億人に近いカトリック信者とする人々の間でリバイバル、悔い改め、回復が起こるようお祈り下さい。